

【参考作品】 六年生【 自分にとっての家族の意味

【はじめ】 工夫した書き出し

いつも、当たり前のように一緒に過ごしている家族。家族は、辞書的な意味だと「夫婦や親子、兄弟など、きわめて近い血のつながりがあり、普通は生活をともにしている人々」のことだ。だけど、私の思う家族とは、少し違う。

【なか①】 自分の経験・体験

私は、父・母・弟・自分の四大家族だ。私がまだ三、四歳のころに弟ができた。弟ができたという話を聞いたとき、自分が姉になると思うとドキドキして、「どういう子なのか見てみたい」、「早く一緒に遊びたい」と、一日千秋の思いで待っていた。ついに弟が生まれたときは、とてもうれしくて、毎日のように遊んだ。けれど、弟が三歳ぐらいになったころから、父と母が急に自分に厳しくなった気がした。私と弟がけんかし、弟が泣くとすぐに両親がかけつけてきて私をしかる。どんな事情でけんかになったのか聞いていなかったのに。母に言われて言い返すと、「お姉ちゃんだから。」とか、「弟がマネするよ。」などと言われ、今でも弟の肩をもつ両親がイヤで、ただ弟をほめる両親を見つめることしかできなかったのだ。だから、「両親は、自分のことは好きではないんだな。」と思いつこんでいた。でも、私が熱で学校を休んでしまった日に、その思い込みを変えることができず、その日は、あまりにも頭が痛くて立つことができなくなって寝込んでしまった。そのとき、まるで弟を忘れたかのように母がつきつきりで看病してくれたことがあった。父も、帰宅したらすぐに私のところに来て、薬をくれたのだった。

【なか②】 体験・経験からわかったこと・考えたこと

わたしは、この経験から、自分にとつての家族とは、かけがえのない大切な存在だと思つた。弟ばかりかばっているといった自分だって、まだ小さかったころはたくさんほめてもらっているはずだし、自分よりも弟のほうがかわいがられていると強く感じるのは、私がちいさかったころにどのくらいやさしくしてもらったかを忘れていてただけであって、かん違いにすぎない。私が両親にしかられる理由は、私に強くなつてほしいと思うからだ。しかも、今自分がいるのは家族のおかげであり、今まで自分を育ててくれたのも家族だ。もし、私が熱で寝込んでしまった時、家族がいなかったら自分はどうなっていたかわからない。

【結論・まとめ】 前とかわつた自分の考え

こんなにも私たちのことを大切に、やさしく愛してくれている家族がいて、私はほんとうに幸せだと思う。ようやく家族のありがたさや大切さをわかるようになった私は、これからも、家族を大切にして感謝の気持ちをもちながら、家族とともに暮らしていこうとつくづく思つた。